

東日本大震災における被ばくスクリーニングを経験して —ランニングの域を超え“ちょーじん(超人)”と呼ばれる主任者—



この人：国立病院機構 九州医療センター 石田隆人氏

この人、こんな所

インタビュー担当：放射線安全取扱部会広報専門委員会
藤淵俊王（九州大学）

国立病院機構は143施設と5万床の病床、6万名の職員を有する日本有数の病院ネットワークを有する独立行政法人です。全国を6か所のブロック（北海道東北、関東信越、東海北陸、近畿、中国四国、九州）に分け、九州ブロックでも28か所の病院があります。今回はそこで放射線取扱主任者として活躍されている石田隆人先生に話を伺います。

藤淵：はじめに、九州医療センターの歴史と概要について紹介をしてください。

石田：九州医療センターは、1994年福岡中央病院と久留米病院を統合し、九州全域を診療圏とする高度総合医療施設として、福岡市シーサイドももち地区に新設されました。高度総合医療施設に位置づけられ、診療、臨床研究、教育・研修の3つの柱に情報発信という機能を加え、より多様な医療ニーズに答えています。現在では名実ともに九州を代表する医療施設に成長するとともに、より高い機能充実に向けて今なお変革を続けています。病院の概況は42の診療科で構成され病床数は702床、外来数は1日当たり約900名です（図1）。

藤淵：日々の職務について教えてください。



図1 九州医療センター

石田：私が携わる心カテ・アンギオ部門には心臓用に2台の血管造影装置と頭と腹部用に1台の血管造影装置があり、主に心臓カテーテル検査や脳血管内治療や腹部の血管造影検査等、血管造影検査・治療全般に従事しています。

藤淵：放射線診療に携わる上で苦慮、注意していることを教えてください。

石田：心カテ・アンギオ部門においては患者さんを中心に多職種との連携を大切にするとともに、被ばくの多い部署になりますので、診療に差し支えない程度に患者さんに対しても我々術者も低被ばくを心掛けるようにしています。苦慮していることは、時間外の急患に担当技師が少ない人数で対応しなければならないことです。

藤淵：国立病院機構ではブロック内で転勤があると伺っています。これまではどちらに赴任し

主任者 コーナー

ましたか。

石田：私は恵まれているのか、比較的転勤が少ない方で北九州市の小倉、長崎、福岡の3か所赴任しました。

藤淵：放射線取扱主任者としての業務内容について教えてください。

石田：ガラスバッジを持つ放射線診療従事者が約180名おり、個人の被ばく管理だけでも相当な数です。放射線取扱主任者は3名選出されており、総括1名、放射線治療1名、その他全般を私が担当しています。業務内容は、被ばく線量管理にガラスバッジの登録・解除、教育訓練、自主点検、漏えい線量測定、放射線障害予防規程の改定及び細則の変更、放射線安全管理委員会の開催などです。

藤淵：主任者の業務で大変なことはありますか？

石田：主任者の業務そのものは特に大変なことはありません。しかし主任者だからこそ任せられた仕事があります。災害医療の派遣です。前職場の長崎医療センター時代に遡ります。

長崎医療センターでは災害医療に力を入れており、1999年の茨城県那珂郡東海村JCO臨界事故の際に災害対策チームが生まれ、住民説明に対し放射線に詳しい人ということになり主任者免許を持っている2人まで絞られました。そのときは行きませんでした。それからあるごとに放射線緊急被ばく医療に係ることが増えていきました。

九州医療センターに異動した際にも同様の研修に行くことが多くなり、そのため、東日本大震災の1週間後、福島県に被ばくスクリーニング派遣されました。

藤淵：失礼な話ですが、事故後1週間ということで怖くはなかったですか？

石田：そうですね。まだマグニチュード7クラスの余震が起きると言われていたときですし、



図2 避難所（事故1週間後）



図3 スクリーニングの実際

また原発で水素爆発が起こっていたときでしたので、多少の不安はありました。しかし担当が避難所で行う作業と言われていましたので、若干安心はしていました（図2）。

藤淵：具体的に被ばくスクリーニングとは何をされたのですか？

石田：放射線検知器（GMサーベイメーター）を用いて、住民に対して災害対策本部が掲げる放射線の量（10万cpm）に振り分けを行うことです。多ければ除染、少なければスクリーニング済証の発行になります（図3）。

藤淵：どのくらいの期間活動をされ、また住民の方から尋ねられたことはありますか？

石田：実働は3日間で500名を超す住民の方のスクリーニングを行いました。住民の方からの

質問事項としては Sv や cpm の意味、放射線や放射能の違いや安定ヨウ素剤の服用時期や、また野菜やペットの測定、より詳しい検査の要求などがありました。

住民の方に対し、ある程度の一定の見解を示さなければならないため、朝夕の対策本部での集まりが学会のように白熱した討論になり、貴重な経験をさせていただきました。やはり混乱の中での情報は錯綜し、目に見えない放射線ということで過剰に恐れている方が多いように感じました。私が担当したいわき市では当時、空間線量はかなり低かったにも関わらず、原発から一部 30 km 圏内になるということで市全体に物資が届かない状況で街の中には誰も歩いていない状況でした。

スクリーニングをしている中でも待ち時間があり、ふと見上げると綺麗な青空が広がっていて、全く人がいない状態に違和感を覚え、「外に出て大丈夫ですよ~!!」と大声で叫びたくなりました。そしてメディカルスタッフジャンパーを着たまま街中を散策してみました。多分、家や車の中から見ていた人からは、放射線が舞っている中、変わり者が 1 人歩いていると見たのかもしれませんが。自分自身の無力さを感じました。しかし、スクリーニング派遣中に様々な人に出会い、ふれあい、支援に行ったにも関わらず逆に被災者の笑顔にどれだけ力をいただいたか分かりません。

藤淵：何か現地に行くことで心境の変化があったようにみえますね。

石田：被災者の姿を見て何か私も頑張らなければと思ったことは間違いありません。当時、ランニングの大会でハーフマラソンをやっと完走する程度でしたが、フルマラソンに挑戦しよう



図 4 173 km 完走

と思いました。半年後、初めてのフルマラソンを何とか完走し、それから何度かフルマラソンに挑戦し、2 年後に 100 km のウルトラマラソンまで挑戦するようになりました。4 年前までは 2 km を走って気分が悪くなっていたのが嘘のようです。今年のゴールデンウィークには 173 km というフルマラソンの 4 倍にもあたる距離まで完走できるようになりました(図 4)。私もどこに向かっているのか分からない状態です。もともと運動はあまり得意ではありません。しかし、福島県での経験から、ここまで頑張れるんだということに自分自身でも驚いています。藤淵：凄い趣味ですね。周りの方々はびっくりされてないですか？

石田：フルマラソンまでは周りも理解してくれていたのですが、だんだんと超人扱いされるようになりました。最近では山に興味湧き、山を走っています。来年は UTMF という富士山の周りで 168 km を走る大会に出場しようと思っています。

藤淵：もう想像がつきません。怪我しないように楽しんでください。

石田：ありがとうございます。

主任者コーナーの編集は、放射線安全取扱部会広報専門委員会が担当しています。

【広報専門委員】上義義朋(委員長)、池本祐志、川辺 睦、鈴木朗史、廣田昌大、藤淵俊王、宮本昌明、吉田浩子